

吉田城址 発掘調査現地説明会資料

令和4年10月29日(土) 10:30～12:00・13:30～15:00 主催：豊橋市文化財センター

コロナ
対策

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、マスク着用及び手指消毒にご協力ください。
体質等の理由によりマスク着用ができない場合は、できるだけ会話を控えるなど、周囲に配慮したご対応をお願い致します。

吉田城について

戦国時代の地方都市・今橋に築かれた今橋城(いまはしじょう)は、後に名を「吉田城」と改められ、江戸時代を通して東三河地方を支配する政治の中心的役割を担っていきました。全国的なお城ブームも追い風となり、平成29年には(公財)日本城郭協会によって『続日本100名城』に選定されるなど、豊橋市を代表する文化財として、市内外から多くのお城ファンが訪れるようになりました。また近年の調査研究の進展によって城址としての評価も高まり、令和4年3月には、豊橋市指定史跡になりました。

このように知名度が上がる一方で、廃城から150年以上を経て、石垣や土塁などの貴重な遺構の損傷が目立ちつつあります。令和元～3年度には、立て続けに石垣が崩落しました。幸い人的被害はありませんでしたが、吉田城の遺構が深刻な状況にあることが広く知られる様になりました。

今回の現地説明会では、令和3年5月に崩落した、千貫櫓台^{せんがんやぐらだい}の解体修復の状況を公開します。地域の大切な文化財である吉田城址の、保存と活用に向けたご理解を頂く機会になればと思います。

調査箇所について



千貫櫓台は、東西約18.0m、南北約15.8m、高さ約4.5mを測り、吉田城址内で最大の面積を誇る櫓台です。明治時代以降に櫓台上で生育した大木の影響等により損傷が蓄積し、最終的に大雨により崩落したと考えられます。発掘調査された石垣の内部からは、拳大～人頭大の石材である【裏込め石(別名：栗石)】などの背面構造や、全国的にも珍しい【埋め殺し】されたより古い時代の石垣、瓦などの様々な遺物が確認されました。

調査成果のポイント1 石垣内部から発見された、“埋め殺し”石垣



崩落した石垣内部から、より古い時代の石垣が確認されました(写真①②)。このことから千貫櫓台の東側付近の石垣は、かつて崩落した石垣の下部を部分的に残し、それを覆い隠し埋め立てる【埋め殺し】を行い、新たな石垣を築いていたことが判明しました。【埋め殺し】石垣は東面長さ6.2m×高さ1.2m、南面長さ2.3m×高さ2.5mを測りますが、東面は北端部で外側に湾曲し、途切れています。これは現在の城郭石垣で見られる【孕み出し】の痕跡と考えられ、江戸時代中期以降に、ここを中心に崩落が生じたと考えられます(写真③)。

石垣の【埋め殺し】は、江戸時代初期には豊臣政権の権威を消し去ること等を目的として、江戸幕府により行われることがありました。しかしながら、江戸時代中期以降に同様の理由で【埋め殺し】が行われたとは考え難いです。当石垣が埋め殺された理由としては、石垣修繕に関する技術・金銭・期間的な制約による、特殊な事情であった可能性が推定されます。

調査成果のポイント2

安土桃山～江戸時代初期に、本丸南面を一体的に整備か？



埋め殺し石垣の特筆すべき点に、令和2年度に発掘調査を行った南多門堀底(本丸南の堀底)石垣と、①石材の種類、②石材加工技術、③構築技法、の共通点が挙げられます。具体的には、①築石の石材は【花崗岩類】を中心に少量の【蛇紋岩】や【緑色岩】等が混ざり、②石材の大半は加工を行わない【野面石】か【素割石】で、少量の【矢穴石】や【ハツリ加工】が確認され、③【野面積み】と【打ち込み接】の中間的技法が用いられています。このことから本丸南面の一帯が、安土桃山時代の城主・池田照政以降、江戸時代初めの吉田藩主・松平忠利のいずれかの時代に、一体的に整備された可能性が指摘できます。

※石垣の表面に利用される石材。一般に「石垣」と理解されているのはコレ。

調査成果のポイント3 裏込め石に付着していた海洋生物



フジツボが付着した裏込め石



カキが付着した裏込め石

【裏込め石】は、石垣正面の石材である【築石】の背面に詰められた拳大～人頭大の石材です。主な機能としては、石垣内部に侵入した水を速やかに排水し、水圧により石垣が損傷することを防ぐ役割があります。

吉田城址では、近年になり石垣の研究が大きく進展し、用いられる石材の産地についても具体像が明らかになりつつあります。【裏込め石】についてはこれまで、主に豊川本流と最大の支流である宇連川の合流地点である、長篠城（新城市）より下流の川原で採集されたと考えられてきました。これに加えて、今回の発掘調査においては、フジツボやカキなどの海洋生物が付着した【花崗岩類】や【雲母片岩】、【チャート】等の【裏込め石】が確認されました。このことから、従来は主に【築石】を採取していたと考えられてきた奥三河湾（現在の蒲郡市）や田原市の三河湾沿岸などからも、【裏込め石】を運んでいたことが判明しました。

調査成果のポイント4 石垣が埋め殺された時期と出土遺物



石垣が崩落した時代を明らかにするためには、考古資料（土器や瓦など）と文献史料（古文書や古絵図など）の双方から、矛盾すること無く該当する時代を明らかにする必要があります。今回崩落した石垣の位置は、古絵図に記録される宝永4年（1707）の地震による崩落のみが知られています。しかしながら新旧石垣の間を埋める【裏込め石】からは、宝永地震に伴う城郭の修復で採用されたと考えられる【複線唐草文軒平瓦】が出土しており、旧石垣が埋め殺されたのは、宝永地震から一定の期間が経ってからということが分かります。

石垣内部からは他にも多くの遺物が出土しており、これらは①損傷していない瓦を長期間にわたり利用し続けたり、②古文書等では知られていない未知の崩落が何度か生じていたこと、を示すものです。こうした実態が【埋め殺し】が行われた時代の推定を困難にしています。現段階では、宝永地震より後、安政東海地震（嘉永7年・1854）より前の、いずれかの期間までに絞り込むことしかできません。

参考資料 発掘調査が完了するまでの石垣の変遷について



①三州吉田城図（江戸時代前期）
遅くともこの頃には、石垣が築かれていました。



②御城御破損所御伺絵図（宝永4年）
調査箇所付近が、「七間」崩落したと記録されます。



③地震之節破損所之覚（嘉永7年）
この地震による破損は無かったようです。



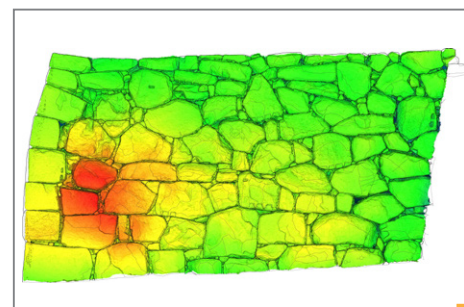
④古写真（大正8年以前）
石垣隅角部に、松の大木が育成しています。



⑤古写真（大正8年以降）
南多門台が崩れています。昭和東南海地震の影響？



⑥崩落前の千貫櫓台（令和元年11月）
看板は崩落に巻き込まれ、壊れてしまいました。



⑦崩落前の石垣の段彩図
孕み出し部分（赤色）が目立っています。



⑧崩落当日の状況（令和3年5月22日）
左図の孕み出しを中心に崩落したことが分かります。



⑨応急復旧作業の様子
安全確保のため、周囲を大型土嚢で囲いました。



⑩発掘調査開始前の清掃作業の状況（左：遠景、右：石垣上のエノキ樹根の様子）
安全確保及び調査の精度を確保するために、発掘と解体を交互に行うこととしました。



⑪上段の発掘調査完了
【裏込め石】がびっしりと姿を現しました。



⑫中段・南半部の発掘調査完了
【埋め殺し】石垣が姿を現しました。大型土嚢で隠れていた石垣下部で変状が見つかり、解体範囲が増えました。



⑬中段・北半部の発掘調査完了



⑭全体の発掘調査完了
石垣基底部の損傷確認のため、断ち割りを行いました。